

# 今年の夏のマーカス島の気候

大道寺重雄

551.582.1/2

今年の夏は東京では非常に高温続きでしたがマーカス島では7, 8月は雨天日数がそれぞれ22, 23日といった雨続きで、うすら寒いという気候で8月22日に補給船で来た人達は、これでは東京からマーカス島に避暑に来たようなものだとびっくりしていました。昨年(1954年)の夏は高温、寡雨で真水の使用を嚴重に制限までしたのとは全く対照的で今年の夏は常に水槽に水が充満しておるといふ現象を呈しました。然し、この反面、観測班員は従来の気候的習慣から雨具を持参していなかったもので、連日の雨のために衣類の干くひまなしという状態から時ならぬ風邪、下痢、神経痛などの患者が出たのには閉口しました。又、高圧配電線、通信施設等にも被害がありました。それで参考のために次に気象資料をかかげます。

	6月	7月	8月
気温	27.9	28.4	27.8°C
	1954年	28.1	27.3
	1955年	27.3	27.3
降水量	33	164	186mm
	1954年	55	495
	1955年	365	

なおマーカス島の年降水総量は旧海軍気象部で観測した3カ年の平均では1168mmであり、昨年は909mmであるから今年の夏の降水量は確かに異常現象とみることが出来ます。

高層の状態をみますと次のように6, 7, 8月ともに500mbから200mbの層は昨年よりも1乃至2°Cばかり低温であり、過去4カ年の資料からみても本年は一番低温になっています。100mbは昨年よりも高温であり特に8月では昨年よりも3.4°Cも高温であったのは注目されます。

		900	800	700	600	500	400	300	200	100mb
6月	1952	19.8	15.2	10.7	3.8	-4.4	15.2	31.6	51.8	74.1°C
	53	19.6	16.0	10.1	3.0	5.4	15.5	30.3	52.0	73.3
	54	20.3	15.1	9.8	2.3	5.9	15.9	30.2	51.8	73.8
	55	19.9	15.2	9.7	2.2	5.8	17.1	31.6	53.5	73.0
7月	1952	20.1	14.9	9.9	2.4	-5.8	16.2	31.1	52.8	70.3
	53	20.2	15.0	9.3	2.2	5.9	16.0	29.9	52.0	71.4
	54	19.7	14.8	9.7	2.7	5.4	16.0	30.3	51.9	73.7
	55	19.8	14.3	9.0	1.8	6.3	16.6	31.9	53.3	72.0
8月	1952	20.3	15.1	9.9	2.4	-5.7	16.2	30.7	52.6	70.6
	53	20.3	15.1	9.7	2.6	5.2	15.5	29.9	51.6	71.3
	54	19.9	15.0	9.7	2.7	5.3	15.3	29.3	50.8	73.1
	55	20.3	15.1	8.9	1.7	6.2	15.8	31.1	54.0	69.7

トロポポーズの高さは7月は昨年は15950Hであり本年は15270Hでした。8月の資料が到着するのが12月頃になるので、この比較が出来ないのが残念です。

等圧面高度の変化をみますと各等圧面ともに18日と9日の週期がきれいにあらわれていました。等圧面高度に関連する事項として7月9日、10日はほとんど終日連続して強い驟雨が降ったのですが、この時は等圧面高度の変化がまず200mbと300mbの高度に低下が現われ、これ以下のところには1日おきて現われました。以上は擾乱現象がまず上層に現われ次第に下層に及んだ顕著な例ですが、その他の大部分は、すくなくとも200mbまでの高さまでは、上層と下層の気圧の変化に時間的ずれは、ほとんど認められないようです。

マーカス島の天気予報の一つの方法として0時観測の上層の気温について、各100mbごとの気層の気温差、 $(T_{(700mb)} - T_{(600mb)}) \dots \dots (T_{(200mb)} - T_{(100mb)})$ を毎日グラフに記入してみましたところが、天気の良い日は $[T_{(700)} - T_{(600)}]$ と $[T_{(600)} - T_{(500)}]$ とは逆相関 $[T_{(600)} - T_{(500)}]$ と $[T_{(500)} - T_{(400)}]$ も逆相関、 $[T_{(500)} - T_{(400)}]$ と $[T_{(400)} - T_{(300)}]$ も逆相関をしておるが、天気が悪い日は、これらの関係がくずれてしまうことがよく判明しました。また $[T_{(200)} - T_{(100)}]$ の値が低い時は必ず天気が悪く翌日の天気も悪いのが判明したので、この図表は簡単に天気を予知するには実に有力な手段でした。

次に上層の風の様子は本年と昨年では次の表のように

7層以下の層では非常に違っております。つまり6月は本年は、ほとんど東風であったのに対し、昨年は南東風であり、7月に至っては本年は地上から7層までの層が南東から東へと変わっており、昨年は南南西から北西へと変わっております。これから推しても昨年と

	June		July	
年別	1954	1955	1954	1955
高度				
1.0	177°	116°	153°	135°
2.0	170	103	208	138
3.0	167	100	214	127
4.0	154	93	291	111
5.0	128	90	320	73
6.0	133	90	321	83
7.0	130	95	326	86
8.0	99	86	60	73
9.0	108	83	67	78
10.0	65	91	62	60
15.0	63	80	42	51
20.0	89	85	90	92

## 「風が見える」

根本順吉

551.55

雑誌「天文と気象」の編集長半井範明氏から、週間朝日に次のような興味ある記事が掲載されていることをうかがった。30年8月21日号の日本拜見「網走周辺、秘境・知床半島」中の記事で、筆者は大宅壮一氏、33頁上段に次のように述べられている。

「また、この半島のもっと低い部分では、“風が見える”といわれている。根室側の気圧が高いので、空気が網走の方へ押し流されて風になる。それが煙のように目に映るのである。そういわれてみると、それらしいものが山と山の間に見られた。」

前後の記述から察すると大宅氏は海上保安庁の船で網走から知床半島の突端にまでゆき、上陸せずに突端から引返してウトロという港(知床半島で第一番の漁港)に入ったとあるから、上記の観察は知床半島西側のオホーツク海上からのものである。

「海から見たところは、ほとんど断崖ばかりで、これにはワシや鶴飼いに使うウミウなどが巣をつくっているし、山から直接海に落ちている珍しい滝も見える。」という記述もある。

本年では中緯度高気圧の配置の様子が顕著に違っておったことが判ります。

なお最後にマーカス気象班の編成と作業を述べます。地上観測3時間毎、高層観測0時、12時、上層観測風観測6時、12時、18時、24時。通信、観測通報と24時間連続のビーコン発射、その他事務信、電源、65馬力発動発電機3台、90馬力発動発電機1台、自動車3台、飛行場照明などが主なもので、これに配置されている人員は地上4名、高層6名、上層6名、通信6名、電源7名ですから、各部門ともに週休もなく、また病気の際の予備員もありません。それですから班員の資格としては健康でしかも技術は各人ともに独立出来るものであることが絶対条件となっています。

写真は藤野六郎氏のもので解説も同氏をわずらわしました。

(筆者：マーカス気象班長)

大へん興味が引かれたので、根室及び網走測候所にこの現象について問合わせたところ、早速、根室測候所山元繁次氏および網走測候所佐々木徳治氏から御親切な回答をよせられたので、御披露して皆様の御参考に供したい。根室の山元氏からの御回答は次のようなものであった。

「知床半島には当所の区内観測所として羅臼(知床半島中央部野付水道に面す)がありますが、当地より直距離約85キロ位で、陸の孤島といわれる程非常に不便な土地で、当所でも年に1回職員が巡る位がやっとなので、その現象について説明する資料も文献もありませんが、想像しますと次のようなものではないでしょうか。

季節が丁度海霧の多い時期に当りますので、山と山との間に濃い海霧が侵入してくる時、遠くから見ての表現ではないでしょうか。御承知のとおり当地方の太平洋岸から侵入してくる海霧には4m/s内外の風がつくのが普通で、山と山との間の谷間を侵入してくるうすい霧を遠くから見ると“風が見える”という表現も、あながちおかしくないようです。当根室地方ではそういう表現は